

# 未来と狂気と危機感とアイスピック

人間科学部  
人間科学科 4年

守山 文也

私達の世界はもうだめだ、と大人達は口早に言つてゐる。

今でも世界の何処かでは戦争で大勢の人々が死んでいて、地球温暖化とやらで海水は上昇し、株

は乱高下を繰り返し、この国では一日に百人ぐらいが自殺をしていたりするらしい。ニュースや新聞では、未来の嘆きやら何とやらで埋まつてゐる。今日の昼のニュースで、環境問題に對して何かの専門家が「我々に危機感が足りない。不幸は突然襲つてくるのだ。未来を望むのならば常に注意して生きなければならない」と言つたのが印象に残つていた。未来なんて想定不可なのだから注意なんてしようがないだろうに、と冷めた頭で考へていた。大体、何もかもに注意をして生きるなんて、考えるだけでしんどそつな話だ。

そんな駄目な世界に呼応してか、この辺りでも獵奇的な殺人者が現れたそうだ。狙いは女子高生で、その心臓を鋭利な刃物で一突き、と言うのが殺人者の手口らしい。分かつてゐることはそれだ

けで、警察はまだ凶器すら特定できていないとワードショード批判していた。こういう事件も被害者の『危機感が足りない』で片付けられるのだろうか。

このように、私の意志とは関係なく色々な出来事や事件が起きている。だけど、まあ、そんなことは子供である私には割とどうでもよくて。どうせ、世界で何が起きても何も変わらないことは知つていて。何も変えられないことも知つていて。だから、私は今日を何となく生きるだけだ。

そうして、今日は近くの公園のベンチに座りながら、コンビニ買つてきたお菓子やジュースを飲みながら、友人とただ駄弁つてゐる。既に日は西に沈み、空は藍色に染まつてゐた。今日は新月なのか、星はいつもよりも煌々と輝いていた。

「今日も綺麗な星空だねえ」

私の隣に座つてゐる友達は肉まんを頬張りながら空を眺めて呟いていた。彼女は制服の上からコートを羽織つてゐる。まだ十月に入つたばかり

でその格好は少し暑苦しくないかと言いたくなるが、彼女にとつてはもう寒いのかもしれない。下手に何かを言つて機嫌を損ねるも馬鹿らしいので、何も言わないことにした。

「最近は曇りが続いていたものね」  
「そーそー」

今日は彼女が公園で星空を見たいと我儘を言い出したため、それに付き合うことになつた。何故、彼女が急にそんなことを言い出したのかは分からぬが、まあそんな日もあるのだろうと深く考えずに納得した。ここ最近は近場で殺人事件が何件もあつたため、集団で寄り道せずに帰ろうと学校から言われてゐるのだが、彼女の頼みならば仕方がない。それに、私が偶然に殺人鬼と出会いつて殺される可能性なんて、それこそ微小なものだ。

「気にするほどでもない」

「そういや、進路とか決めたの」  
「いいえ、全く」  
「マジで」

彼女が驚くのも無理は無い。今の私達は高校三年生だ。そろそろ進路を決めなければいけない時期に来ている。だが、私は未だに何も決められずに居る。進学か就職か、それすらも考えていない。

「どうにも、未来の事について考えるのは苦手なよ」

「……それにしても、もうちょっと危機感とか持つたほうがいいんじゃないかな」

「危機感、ねえ」

どうにも、私はそういうのを持つのが苦手らしい。いや、苦手というよりも意識することができない、という方が正しいのだろうか。

「だって、大人達は経済危機がどうとか不況がどうとか言つてるけれど、何も変わらずに生活してるじゃない」

「わーお、急に話がぶつ飛んだね」

「茶化さないで。……まあ、そういうのを見ていたら、何というか……結局、私が何をしても何も変わらないんじゃないのかなって思うのよ」

何處へ進学しようが就職しようが、落ち着く所に落ち着くだけのではないだろうか。その思いをどうしても拭い去ることができない。勿論、そうでないことは確かに分かっている。頭では分かっているのだが、実感として感じることができない。彼女が言う「危機感がない」と言う言葉は

成る程、的を射ているように思えた。友人は頭をポリポリと搔いて呆れ顔になつていい。はいつももまして脈絡がないように思えた。

「……そう言えば、ニュースでそんな事を言つていたわね」

「被害者は全員、女の子らしいよ」

ふうん、と相槌を打つ。この近くで何人かは死んだことは知つていたが、それが全員女性なのは初めて聞いた。

「アイスピックで心臓を一突き、だつてさー」

tron、と私の胸に拳の底を当てる。その後、手を開いて私の胸の辺りを弄り「うーむ、健康的なあばら骨」と呟いたのが何となくイラッとしたので、ごつんと頭に拳骨を落としてやつた。「痛いよう」と泣き言を漏らしていたが、私は無視した。

大体、件の殺人鬼のせいで、学校からは「寄り道せずに帰りましょう」とお達しが出しているのに彼女の寄り道に付いてきてあげたのだから文句を言われる筋合はない。

ふう、と一つ溜息を吐く。

「その殺人鬼は何を考えて人なんか殺しているのかしらね」

それは、単純な疑問だった。ワイドショーでは自己顯示欲がどうのこうの、社会への不安がどうのこうのと言つていた記憶がある。だが、

「そりゃ最近、この辺りに殺人鬼が出たとか」

急な話題転換に私は少しまづいた。彼女の話

「何も考えていないんじゃないかなあ」

「何も考えていないって」

思わず私は口ごもる。それは、私の常識では些か考えられないことだったからだ。私はこれまでの人生で人を殺したことは勿論無いが、それでも、何も考えずに人を殺せるとは思えない。

「だつて、人を愛するのだつて理由は要らないじゃん」

はにかみながら、彼女は言った。

「……つまり、人を愛することと殺すことは一緒つてこと？」

「ま、そういうこと」

「何というか、すごいロマンチックな理論ね」

「でしょ？」

にかつ、と彼女は得意気に笑う。何か「いいこと言つたぜ！」的な態度が少し気に食わないが、

それはそれとして彼女の理論は少し面白いなども思つた。今まで霧に包まれていた犯人像が、

「だからまあ、これは仕方のない事なんだよね」

彼女はそう呟いて、自分のコートの懷に手を入れた。そして間髪入れずに何かを取り出して、それを私の胸へと叩きつけた。あまりにも急な行動

に面食らつて、少し後ろへと仰け反つた。

「ちよつと、急に何を、するの、よ……？」

急に息苦しさを感じ、言葉が詰まってしまう。

胸に、何かが吹き出すような痛みを感じた。それ

は叩き付けられた痛みというよりも、何かが胸に挿じ込まれたかのような、異物感を伴う痛みだつた。

「……え、」

頭を下げてみると、胸にアイスピックが刺さっているのが見えた。その細い刃はあばら骨の隙間を滑るように刺さっていた。突然の出来事に脳の処理が追いつかない。今、私は彼女に何をされたのか、どうなつているのか、混乱している。

『アイスピックで心臓を一突き、だつてさー』

ふと、彼女の言葉が脳裏に蘇る。

そう言えば、警察は犯人の凶器についてまだ特定できていないと言つていた。それなのに、彼女は何の迷いもなく犯人の凶器について口にしていた。

「どう、し、て」

「言つたでしょ。理由なんて特に無いよ、必要な

い」

そこに居たのは、人の服を着た悪意だった。いい、と普段と変わらない笑みを彼女は浮かべている。

『うーむ、健康的なあばら骨』

あの時、胸の辺りを触っていたのもあばら骨の位置を確認するためだつたのではないか。いざ心

臓に刺す時に、邪魔にならないように前もつて調

べたのではないか。一つ氣づけば、彼女の行動の一つ一つが数珠繋ぎのように連なつていく。コートを羽織つていたのは凶器を懷に隠していたから。今日は公園で星空を見ようと言い出したのも、人気のない場所に呼び出したかったから。今にしで思えば、不自然な所ばかりだつた。よく注意していれば私の友達が殺人鬼ということに気づくことができたのかもしれないのに。そして、気付くのが遅すぎた。手遅れだつた。

もう、何をしても助からない。

『本当に明日なんてなかつたね』

彼女は笑みを浮かべたまま、アイスピックの取つ手を握りしめて刃先を更に胸の奥深くへと沈ませた。不思議な事にアイスピックが沈めば沈むほど痛みは消えていき、代わりに奇妙な脱力感が私の身体を支配した。胸からなにか大事な物が零れ落ちているような気もした。それは、温かいもので、絶対に零れ落としてはいけないような大切なモノだつた気がするのに、戻す気になれなかつた。その零れ落ちたものを補うように、眠気が私の中に立ち込めてくる。

朦朧とする意識の中で、私は何処かで聞いた言葉を思い出していた。

『我々には危機感が足りない。不幸は突然襲つて

くるのだ。未来を望むのならば常に注意して生き  
なければならない』